

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 生命・環境科学部共通研究室

職階 教授

氏名 江口祐輔

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3 年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

2021年度に開設されたフィールドワークセンター長として、大学初となるサテライトキャンパスの運営を担っている。地域の課題と問題（動物との共生、獣害対策、地域の資源を活用した地域づくり）を研究と地域住民の実践による連携を身につけるフィールドワーク教育を行う。授業は、環境野生動物学、野生動物共生学、環境生態学やオムニバス担当授業を担当する。本学へのリモート講義、本学に出向いての講義を行う。また、フィールドワークセンターにおける集中的な実習・研究のコーディネート、動物行動学、獣害対策分野を中心とした卒論、修論の研究指導を行っている。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
環境生態学	環境科学科	必修	1	84
環境野生動物学	環境科学科	自由	2	31
応用動物行動学	動物応用科学科	必修	2	110
野生動物共生学	環境科学科	自由	3	18
リサーチローテーション	環境科学科	必修	2	78
科学技術英語	環境科学科	選択	3	7
地球環境科学	環境科学科	必修	1	77
卒業論文	食品生命科学科	選択	4	5
卒業論文	環境科学科	選択	4	2
環境生命科学	環境科学科	選択	2	54
動物資源経済学演習	動物応用科学科	選択	3	24
生物多様性フィールドワーク演習	環境科学科	選択	3	27

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

野生動物行動学および生態学を通して学生に自然科学だけでなく社会科学に対する興味を持ち、学ぶ喜びや探究心を養い、環境保全やヒトと動物の共存などの社会的要請に応えられる広い視野を持った人材として社会へ巣立ってほしい。そのために、環境・動物・健康の専門分野を修学し、さらに、視野の広いジェネラリストとして役立つ人材を育てたい。

自ら考え・動くことのできる人材を育成するために、理解の促進と学びの定着を図り、あらゆる学びの場面で主体性を持たせるようにする。また、現場において様々な立場からの意見に触れることで多角的視点を持つことを習慣づけ、問題解決力を身につけられるよう考え、試行錯誤できる環境を与える。問題の本質を見極め、あるべき姿（ゴール）に到達するために必要なプロセスを設定できる能力を身に着けるようにする。そのためには、常に対象の動物や他者の視点にからも物事を見つめることによって問題を理解できるようになってほしい。これらを養うために、特にゼミナールや研究室活動、地域活動を通じて、様々な背景を有する人々と触れ合い、広い視野を持ちながら多角的視点で物事を思考できる環境を提供する。

動物行動学を主としながらもその周辺分野についても理解を深めることで知識の裾野が広がり、より専門領域の発展性や応用性を高めることができる。「広い裾野なしに大山なし」を意識しながら、野生動物管理学・共生学分野での実践的ジェネラリストに必要な基礎知識と技能、思考力、分析力、判断力、表現力を講義・実習、卒業研究を通じて養い、さらには学生が現場の環境や住民の生活を肌で感じながら人と動物の軋轢に対する問題を発見し適切な解決方法を導く研究テーマを見出し実践できるようプログラムを提供したい。将来、研究者を目指す学生には、アカデミックに没頭するとそれ自体が特別なもの、高貴なものと勘違いする落とし穴にハマらないようにしたい。アカデミックは、幸せなLIFEを作るものであることを常に意識できるようになってもらいたい。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

講義に対する興味や好奇心を刺激できるよう、動画を利用して視覚的にイメージを定着させた上で、理論を説明する講義を行う。見易さ・理解し易さを重視し、学びの定着を図るため、学生自身のこれまでの経験や興味、共感できる内容と関連させながら新たな事柄を理解させることを心がけている。また、考える習慣を身につけてもらうため、講義中の口調は「伝える」だけでなく、学生へ「問いかけ」ながら講義を進行させることを心がけている。

講義科目に対して比較的興味が薄い学生もいるので、他の分野との関連性や、この分野を学ぶことで将来的に役立つメリットを伝えるようにしている。

フィールドワークによる、現場の問題解決能力の育成や研究スキルに関する教育については、地域環境や住民の意識を把握することから地域の問題を設定し、解決する手法を導くまでを実践できるようなカリキュラムを提供する。

過去の研究成果や地域の活動事例を理解し、将来のあり方について積極的に議論できようになっしてほしい。

フィールドワークセンターで卒業研究や大学院の研究を実施する学生には基礎と応用の垣根なく、フィールドワークや実験的研究と現場対応を融合させた、問題の発見から解決手法の開発そして現場での実装までを意識した実践的研究手法を学べるカリキュラムを提供したい。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

大人数を対象とした講義では、オンデマンド式に加えて毎回の理解度確認や各自の意見を求める小テストを実施することで、学生の主体的な学びを誘導している。また、大学内の博物館を利用して講義を行った。フィールドワークセンターにおける実習では、地域自治体、企業、住民も参加、交流しながら実践的な実習を行っている。

(2) ICTの教育活用

有

理解を深めるため、研究活動や研究手法の動画を利用した講義を行う。実務家教員であることの強みを生かして、学生が学んだ項目がどのように実社会と繋がり、どのように役立っているのかを理解できるように、全国の現場の実際の活動をまとめた動画と、現場の方々のインタビュー動画を作成し、授業に活用している。

LMS を利用して講義後に理解度を確認するための課題や小テストを定期的の実施している。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

授業では、学生が学んだ項目がどのように実社会と繋がり、どのように役立っているのかを理解できるように、全国の現場の実際の活動をまとめた動画と、現場の方々のインタビュー動画を作成し、授業に活用している。知識の整理や記憶を高めるために、授業資料の一部を書き込み式にしている。

実習では、卒業生、地域自治体、企業、住民も参加、交流しながら実践的な実習を行っている。LMS を利用して講義後に理解度を確認するための課題や小テストを定期的の実施している。

(2) 学生の理解度の把握

B

講義に関しては課題提出や確認テストを行っているが、理解度を十分に把握できているとまではいかない。課題レポートを見ると、十分にこちらの意図を理解できていない学生も見受けられる。また、各自の意見を求めても自分で思考するより、文献や既存情報に頼りすぎる傾向が認められる。課題内容を再考し、学生が自ら考える機会を与えることで、理解度を上げてゆきたい。実習は少人数の選択実習の担当だったので、学生の理解度は把握できた。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

B

学生によって取り組みに大きなばらつきがある。自学自習を促進させるために、関連資料や書籍などの紹介を増やしている。

(4) 学生とのコミュニケーション

B

メールや Google Meet、対面式等により、できる限り対応している。

(5) 双方向授業への工夫

B

対面授業では、教室全体を移動しながら学生と対話形式で、意見や質問を引き出すことなどを行っている。リモート・オンデマンド授業では難しいのが現状であるが、課題提出では答えを求めるだけでなく、授業に対する質問や理解度を探る質問も出すようにしている。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

担当科目が自由科目で履修者が少ないため、授業評価を実施していない科目がある。次年度から選択科目に変更されるので、履修者も増える見込みであり、今後の授業評価の結果を反映させたい。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

授業の一部で扱う解剖学で覚えるのが大変だという意見があったので、博物館を利用した授業を行い、直接目で見て、機能を理解しながら覚えていけるようにした。学生は積極的に授業に参加し、授業中に多くの質問を受けることができた。

(3) (2)を踏まえた次年度の取組

次年度もこの取り組みを継続する。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

博物館等、大学構内を利用しながら学生の理解向上に繋げている。また、授業成績の向上につながる思考技術と理解力の向上を目指して、知識の伝達だけでなく、多様な考え方について頻繁に授業中で紹介している。今後は、専門分野（授業科目関連）で生き生きと活躍する卒業生の大学時代の学びについてのインタビューや意見を紹介して、積極的に授業に参加できる環境を作っていきたい。

（２）（１）の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

学生はフィールドワークに対して積極的に参加している。しかし、フィールドワークは「現地で活動する」という抽象的なイメージのしか持たない場合が多いので、社会実装、社会貢献、問題解決につながるフィールドワークのあり方をより明確に理解できるように、さまざまなテーマについて意見交換をする機会を研究室活動として実施する。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

積極的な参加を心がけているが、対面のFDに参加できないことがほとんどで苦労している。教育・研究倫理の質の向上に役立った。今後も積極的にFD活動に参加していきたい。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

フィールドワークセンターにおける体験型の講義・実習をカリキュラムに導入したい。L学部では学科を跨いだ総合的な実習とし、フィールドワークや地域づくりの全体像を理解しながら専門性を伸ばすカリキュラムを構築したい。

また、高度なリモート実習・演習システムを開発していきたい。野生動物の実際の生息環境を体験的に学ぶことが望ましいが、大人数が一堂に現場に入ると、環境を攪乱する可能性もある。一方、野生動物の細かい痕跡は、写真や動画では肉眼で見る奥行きを表現できないため直感的に理解することが難しい。そこで、技術成長が著しい、映像・通信技術を融合し、教室にしながら、生きた自然の教材をリモートで体験することができる映像システムを目指したい。

麻布大学を含む美郷町の産官学民の連携構想の美郷バレーを十分に利用し、実践的なアントレプレナー教育を取り入れたい。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

シラバス

配布資料

授業評価